

動き回る子どもたちに頭を痛めるドイツの先生たち

動きのある保育室や教室

回遊魚のような子どもが、担任の先生を悩ましています。

保育園も小学校も同じ悩みようです。「静かにしなさい！」も一時的で、すぐにそわそわ、がさがさが始まります。

このような悩みは先進諸国共通の「小1プロブレム」とも呼ばれています。

私が訪れた国々の保育園や学校での対策を紹介します。

まず、私には親しみやすいドイツから。

ドイツの先生方は、子どもに「じっとしていなさい」というから余計に動き回るのを、逆に動きをつくってあげようといった寛大さです。

それではどのようにするのでしょうか？

答えは、大きなテーブルや棚に（一般にドイツでは机や棚はどっしりとした無垢材で重いです。）キャスターを付けて、子どもたちの手で保育室（5歳児）や教室の机を動かして配置変えます。子どもたちのアイデアと工夫で空間を変えれば、子ども自身の勝手な動きが少なくなるという考え方です。



大きなドイツ製らしいキャスター付きの保育家具です。

狭い空間から広い空間への変化を感じさせる遊び

これもドイツの体育の先生の発想ですが、子どもが動くときに、広い場所から狭い場所へ、逆に狭いところから広いところに移動できる遊びを工夫します。

部屋のドアや狭い空間を利用して、大きなビニールを使って、トンネルのような空間を作ります。子どもの隠れる部屋でありトンネルです。子どもがそこから出てくるときに、子どもがハッとするような仕掛けを用意します。例えば、プラスチックのカエルやヘビのおもちゃを入りに置くことで、子どもにドキドキした感情の起伏を体験させます。

おもしろいアイデアですが、頭の柔らかな先生が求められます。



教室の中に作られた段ボール製のアドベンチャーハウスです。

私の昔からの知人ホルツ・ヘルツさん考案のペダロ（ペダルの意味です）

ドイツの木工職人ホルツ・ヘルツさんが、障がいのある子どもや、身体的感覚受容能力が充分でない子どものために考案した感覚・運動教具が、ドイツの学校や専門施設では広く使われています。

ホルツ・ヘルツさんの名前の意味はドイツ語そのもの「木の心」です。

子どもが全身を使って、自分の体感覚や身体的機能を自覚できるように、バランス感覚を中心にした運動です。子どもの身体感覚を刺激し、落ち着くといわれています。



平衡機能遊びといわれるペダロで遊ぶ子どもたち。

ヒューゴ・キュッケルハウスの感覚体験空間

ドイツEssen（ドイツ北部）のキュッケルハウス博物館には、ドイツの教育者たちが年間に数千人訪れるといわれています。この博物館の魅力は、子どもに「感覚体験」のチャンスを与えるためのアイデアに充ちていることです。感じる、見る、聞く、触れる、匂う、味わう、そして知るという、子どもの全身を通して、子どもに「存在」の感覚を体験させることが、キュッケルハウスの理念です。

子どもは自分のいる（存在）環境に意味を与える作業をするために、環境から限りなく与え続けられる情報や刺激を処理しようとするが、知覚経験が不十分な場合、この情報処理機能がうまく働かないと、ヒューゴ・キュッケルハウスは主張します。

それゆえに、環境理解や情報処理をする場合、子どもは全身の感覚を駆使して理解しようとしているために、処理しやすいような感覚回路を与えることで、子どもの情報処理機能を援助することを目的にしています



写真の商品は日本製ですが、キュッケルハウスのアイデアから作られました。
目と手の協調運動遊びから子どもが精神的な安定感をえるという考えです。